令和６年度小松市立蓮代寺小学校　学校評価２

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・８月提出）	取組の成果と課題（年度末・３月提出）
生徒指導	**＜いじめの積極的な認知と早期対応＞** **・学期に１回いじめアンケートと担任による個別面談を実施する。 ・軽重に関わらず、いじめの訴えがあったものについて対応記録をとり、その都度情報共有を行う。**	・アンケートの時期を早め、面談の期間を長くしたことで、どの学年も取り組みやすかった。一人一人と面談をしっかり実施するとどうしても時間が長くなってしまうので、２学期は面談時間の軽重のつけ方を意識して取り組めるようにしたい。 ・当事者同士は遊びだと思っていても、外から見たらいじめのように見えるような行為については、適切な指導が必要であり、記録をしっかりととることが必要。 ・児童理解の会は今後も定期的に行う。	・いじめアンケートの時期は、面談と対応の期間を考慮し早めに設定し、面談はアンケート後に内容を整理して級外も入れながら分担して行える体制をつくり、スムーズに面談が行えるようにすることで早期対応につなげることができた。 ・学期初めと学期末にいじめの未然防止や積極的な生徒指導について共通確認をすることで、見逃しの予防につなげることができた。 ・児童理解の会は週1回で行えているが、共有した情報の記録の残し方についてICTを活用して改善をしていく。また、具体的な改善策については、ケース会議を柔軟に行えるようにしていく。
特別支援教育	**＜支援を必要とする児童の指導・支援の充実＞** **・年間3回校内支援委員会部会を開催し、児童にかかる複数の職員で共通理解を図りながら、支援の必要な児童の支援について検討する。 ・支援が必要な児童については、必要に応じて支援会議を開催し、誰がいつ、何をするのかを協議し、支援の充実を図る。**	・支援会議や専門相談を積極的に行い、適切な支援について話し合う機会が持てた。 ・今後も、他の学年の支援については、同じ階の学年で助け合っていく。また、階の違う学年の児童に関しては、児童理解の会等を通じて、支援の在り方の共通理解を図る。 ・特別支援員の日誌を活用して,支援の充実を図りたい。	・校内支援委員会（部会）や児童理解の会で、支援や配慮の必要な児童について共通理解しているため、早期に必要な支援を考えることができている。しかし、支援の方法を共有するも、担任は、他学年の児童の支援までは手が回っていない。 ・支援会議も必要な時に開催できた。 ・支援員にどの児童についてほしいのかを伝えてあるため、適切な支援ができている。
道徳教育	**＜授業を中心に教育活動全体を通して道徳教育の充実を図る＞** **・道徳授業の指導法について校内研修会を年１回以上行い、指導力の向上を目指す。 ・保護者に年１回以上の授業公開を行ったり、道徳通信等で重点内容項目の授業のふり返り等を紹介したりして家庭との連携を図っていく。**	・重点内容項目の授業の様子を届ける通信を1回出すことができた。 ・夏休み中に校内研修を行い、２学期以降の授業実践に活かせるようにする。 ・２学期には人権週間もあるので、道徳教育と関連付けた提案を行ったり、実践の内容を各家庭に伝えていったりして道徳教育の充実を図っていく。	・道徳推進教師の研修内容をもとに夏休みに単元構想シートを活用した校内研修を行うことができた。また、道徳の通知表や要録における評価の仕方についての研修を行うことができた。 ・重点内容項目の授業の様子や人権週間の取り組みの様子についての通信を学期に１，２回ペースで出し、家庭との連携を図ることができた。
読書教育	**＜多くの本にふれ、読書習慣を確立する＞** **・毎週木曜日の朝学習は、朝読書の時間とし、手元に本がある習慣づけの一助とする。 ・お勧めの本の紹介や新着図書の情報を図書だより等を通じて年6回以上公開する。 ・学期ごとの読書の目標を達成できるように推進する。**	・木曜の朝読書を推進するために、水曜の5限後本の貸し出しをする。図書室で朝読書をおこない場合は、担任が貸出する。 ・朝読書を活用して「チャレンジ10冊」のブックトークや読み聞かせをできる範囲で行う。学級文庫に「チャレンジ10冊」の本を置く期間を設定する。 ・「本のとびら」のブックトークは効果があった。 ・委員会活動の取組や読み聞かせ等を行うことで、読書の意欲を高める。 ・学期末に各教室で読書の表彰を行い、意欲を高めたり、よさを認め合ったりする場とする。	・図書ボランティアによるお話ポケットが本と触れ合う良い機会になっている。 ・読書の時間だけでなく、国語の時間に並行読書として本を読む機会を設けたことにより、あまり本を読まない児童も読むことができた。来年度は、学期に1回は並行読書やブックトークに取り組むようにする。 ・木曜日の朝読書は取り組めている。あまり読書が進まない学級に一時的にチャレンジの本などを置いたことにより、手に取る数が増えた。 ・学期末に読書の表彰式を学級で行うことは、児童同士の認め合う機会となり、読書推進の啓発となった。
キャリア教育	**＜学校の特色を生かし、計画的にキャリア教育を推進＞** **キャリア教育の視点を意識して各教科や総合的な学習の時間に外部講師を招聘したり、見学に行ったりして社会とつながり、よりよい未来を拓く児童の育成を目指した活動を学期に１回以上行う。**	・外部講師を上手く活用したり、積極的に社会科見学へ行ったりすることができた。 ・社会科見学等を行ったら、簡単にメモを残していけるようにすると、次年度にもつながっていく。	・学期末に外部講師と校外学習についての一覧の見直しを行い次年度にもつながるようにした。その際、内容や次年度への申し送りなどメモを残すようにした。
保健健康教育	**＜自分の心の状態を理解し、適切に対処できる子を育む＞** **・健康チェックやアンケートを行い、自分の心と体をみつめ、自己理解をすすめる。 ・全校で体をほぐす体操に取り組み、心と体を整える習慣をつける。 ・3，5，6年生で授業実践を行い、心と体のつながりについての研究を推進する。**	・体をほぐす体操については、当初計画していたが、朝活動での時間確保が難しく、今後も実施予定はない。 ・全校での取り組みとして、心に関する絵本の読み聞かせを行った。自分の心と体について考えるいい機会になった。今後も継続し、取組や振り返り等を他の児童や保護者にも知らせていく。 ・健康チェックの目的や取り組み方を再度確認し、有効に活用できるよう再度検討する。 ・授業実践は夏休みに検討を行い、２学期に授業実践を行う予定である。	・心のアンケートは継続的に実施することで、児童理解を深めることが出来た。校内研修で、結果の見方について学んだ。今後も継続して実施し、対応等にいかしていく。 ・健康チェックはどのように端末を使用すれば、指導に有効に活用できるのか検討してきた。児童任せとなり、改善がされない項目もあるので、適宜、担任か確認でき、指導に活かせるようにしていきたい。 ・授業実践やその他の取組を進めることで、児童が自分の心身の健康についてや対処する方法等を学ぶことができた。職員で指導案の検討をしたり、全員で研究授業の参観を行ったりした。来年度に向け、さらに研究を進めていきたい。
ＩＣＴ活用	**＜日常的なICT機器の活用を推進する＞** **健康チェックやアンケートをICT機器を使って行い、授業以外の場でも活用する。Qubenaを用いた家庭学習も定期的に行い、家庭学習での使用頻度も上げる。**	・朝休みの間に端末を準備しておく習慣がまだ身についていないので、２学期前に共通理解を図る。 ・健康チェックは自分自身で振り返ることができないため、やり方を改善する必要がある。 ・ドリル教材については、感度が悪く宿題として不向きなものもある。どのように家庭学習で活用しているか担任任せになって見えにくいので、実践交流の場などで共通理解を図りたい。	・健康チェックをICT化して使い始めたことで、健康チェックを端末で行う操作が全学年できるようになった。児童の回答一覧も教員側で閲覧することができるようになった。しかし、端末の不具合で手間がかかることもあるため、端末自体の改善が必要。 ・家庭学習での使用頻度を上げることができなかった。キュビナは端末の感度が悪いことや、問題の特性により問題の選別に手間がかかる等、課題を設定する教師側にキュビナについての理解が必要である。児童にはキュビナが負担ではなく、学習に役立つものと感じられるようしていく。また、学習用端末を使う＝キュビナではなく、インターネットを活用した調べ学習の方法や、ノート代わりに端末を活用する方法等学習アイディアを教師が豊富にもつ必要がある。そのため端末を活用した学習の仕方(させ方)や指導について、教師間での情報交流が活発になるような場を作っていきたい。
家庭・地域社会との連携	**＜学校教育活動におけるSDGsの取組を発信＞** **・ユネスコスクールとしての教育実践を地域に発信し、特色ある学校づくりを行うため、各学年等のとりくみを紹介する。**	・地域の人材や自然を活かした教育活動に取り組むことができた。 ・学校だより、学級通信、学校ホームページを通して、これからも継続して発信していきたい。	・地域の先生から「がめつき音頭」や「蓮代寺太鼓」について学び、児童は練習に主体的に取り組み、蓮小フェスタでは地域の方や保護者の前で発表することができた。 ・木場潟体験学習プログラムを通して、木場潟の自然に触れる活動に取り組むことができた。各学年に応じたプログラム内容で、子どもたちは興味関心を持って取り組むことができた。来年度も探究的な活動を充実させていきたい。

学校関係者評価	○どの学年も授業に落ち着いて取り組んでいる。 ○支援員の先生方が支援を必要とする児童に寄り添い、的確な支援をしている。これからもコーディネーター、担任、支援員の先生方が連携をとって支援を継続してほしい。 ○地域の方との学習や木場潟体験学習プログラムなど、地域を活かした学習に取り組むことで、子どもの興味関心、探究心を深めている。 ○ICT機器を日常的に活用している。また、学習場面以外にも活用しているのがよい。